

る統計的な量に近付いて行くようであります。その様子はあたかも至上命令を受けているかのようであって、低気圧が発生したり消滅したりするのは、夏迄に進んで行く途中の道草のようなものであります。いいかえると短期で重要な量は長期変動の中の一つの管みにすぎないのです。しかしながらこの週期的な現象の中どの程度のものが大気内のエネルギーの形態の交替現象として説明され得るものなのか、あるいは外力による強制的なものなのか区別がつかない。かくして大気現象が長期の問題になると大気系内のみ原因を置いた因果律的な論法は現状ではどうかつに展開出来ない。否しせば短期的現象にも存在し得る難問ではないでしょうか。以上述べましたように、大気にはいくつかの週期的な現象の存在が見られます。私は先ず東北地方の豊凶に関係する夏期3カ月以上もの異常低温(高温)の現象のみに注目することによって比較的短週期的な現象や余りにも長週期的な現象を取り除いたものについて調査して見ようとしています。私が考えておりますことは、大気は系外からエネルギーを受けるがそれが積算的な形で蓄積され連続的に消費されない。この段階を第1段階としますと最初の蓄積状態は世界の特殊な地域にある種の異常な偏倚状態として見えて来る。ある臨界値(大気の性質が支配するが臨界値を大にしたり小にしたりする状態は長期予報的に重要)を越すと、この蓄積されたエネルギーは活動をはじめが移動(おそらくは南北が重要)分散のほかは形態の交替等を起して、摩擦による熱エネルギー化して消滅

する迄細分化しながらある期間振動的な現象を惹き起す。このように考えております。この第2段階にも地形の影響等で特殊な地域にある種の偏倚状態の繰り返しを見せる。第1段階の偏倚と第2段階の偏倚には地域や状態に相違があり得るように思います。この蓄積されたエネルギーは特に吸収し易い週期現象を卓越させます。実際の現象は合成で複雑であります。非常に単純な異常現象などは扱い易いと考えるが、現象分離の問題は基本的なものと思われる。また如何なる資料を用いるのが合理的かは大切であるが現実的に資料には大きな制限があります。

次に以上の見解を補足して私が北半球の空気量の変動などになぜ注目したかを述べたいと思います。例えば気温なら気温は一年の季節変動をいたします。この季節変動は年々では複雑な偏倚を持っております。この偏倚を週期分析等の技術を駆使して、すでに高橋先生は複雑な現象の分類・解析をされております。私は普通短期の研究では無視されがちな質量の移動や分布を問題にしているのは、過去の資料は地上の気圧が主であることと、また北半球の空気量はちょうど気温の季節変動のごとく大きく季節変動をしており、しかも凶冷をおこすような持続的な異常低温は季節変動の大きな disturbance とみられますが、空気量の季節変動にも異常さが現われます。私はこの空気量の変動の異常さに関与した北半球の大気の状態を空間的に解析して見ようとしているものなのです。

シーボルト事件と台風

1828年、有名なシーボルトは在日5年の任期が終って帰国することになった。ここにははしなくもシーボルト事件が起り、彼はそのため14カ月の監禁をうけ、日本人側も多数の犠牲者をだすことになった。岡田東助は自殺し、天文方の高橋作左衛門は卒死した。ところで歴史上有名なこのシーボルト事件は台風が原因で起ったことは興味深い。シーボルトが在日中に収集した研究資料は、書籍、地図、器具、動物、植物など山のようにあった。それらをオランダ船コルネリウス・ハウトマン号に積んで送り出そうとした時、それは8月10日(1828)のことであったが「古来これなき大嵐」「数万人の死亡ありし程」(甲子夜話)の大台風がしゅう来し、船は岸に打ちあげられ、舳を民家の2階につつこんで大破した。役人が出張してとり調べたところ、シーボルトの荷物の中から地図や各種の書籍をはじめ国外持出し厳禁の品々、葵の紋服や大小の刀などがあらわれた。甲子夜話には「長崎御役台より船中残らず相改め、図は勿論写しかけまで戻り来る。実の神風というべし」と嵐のおかげで、シーボルトの密輸出のバレたことを礼讃している。シーボルトはスパイの容疑で長崎の出島に監禁され、14カ月の後に国外追放、再度の渡来を禁じられて許された(しかし

1858年に追放令は撤去され、59年に再び長崎に来た)。シーボルトは、どうしてこれらの禁制品を入手したか、彼はヨーロッパの学問知識を伝授する代償として、わがオランダ心酔の学者たちから集めたのであった。天文方兼御書奉行高橋作左衛門は、シーボルトがナポレオンの戦記、露人クルゼンステルの世界一周記4冊、蘭領東印度の地図9枚をもっていることを知ると、どうしても、それを手に手れよう、これは海外の大勢を知る好材料である、翻訳して幕府に差出したいと思ったので、譲り受けたいといったが、シーボルトは応じない。それで日本国内の産物の記録と、日本と蝦夷の地図とを交換することになった。当時地図を外人に譲ることは死罪にあたる重大事であったが、ついに意を決して、幕府の文庫にあった伊能忠敬作の日本と蝦夷の地図を部下に命じて複写させ、物産の記録をそえて前記の書籍や地図と交換した。シーボルトの所持した禁制の図書全部を押収することはできなかった。一部は巧みに目をのがれ、あるいは模写となって残り、また、大部分のものはオランダやジャヴァに発送済みになっていた。これらは後にシーボルトが日本に関する幾種かの著述をするときに大へん役立ったのである。以上台風期にちなんで台風縁のある歴史の一こまを紹介した。(松山思水著《シーボルトの功績》による) (根本順吉)